發明品博覽會實演堀井謄寫版印刷

早取順百人一首

寂蓮法師　ム　むらさめの露もまだひぬ槙の葉に霧たちのぼる秋の夕ぐれ
藤原敏行朝臣　ス　すみの江の岸による波よるさへや夢のかよひぢ人目よくらむ
紫式部　メ　めぐりあひて見しやそれともわかぬまに雲がくれにし夜半の月かな
文屋康秀　フ　ふくからに秋の草木のしをるればむべ山風をあらしといふらむ
良暹法師　サ　さびしさに宿をたち出でてながむればいづこも同じ秋の夕ぐれ
後徳大寺左大臣　ホ　ほととぎす鳴きつる方をながむればただ有明の月ぞのこれる
崇徳院　セ　せをはやみ岩にせかるる滝川のわれても末にあはむとぞ思ふ
大納言公任　タキ　滝の音はたえて久しくなりぬれど名こそ流れてなほ聞えけれ
山部赤人　タゴ　田子の浦にうち出でてみれば白妙の富士の高嶺に雪はふりつつ
權中納言匡房　タカ　高砂の尾の上の桜咲きにけり外山の霞たたずもあらなむ
中納言行平　タチ　立ち別れいなばの山の峰に生ふるまつとし聞かば今帰り来む
式子内親王　タマ　玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶることの弱りもぞする
藤原興風　タレ　誰をかも知る人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに
蝉丸　コレ　これやこの行くも帰るも別れては知るも知らぬも逢坂の関
權中納言定家　コヌ　来ぬ人をまつほの浦の夕なぎに焼くや藻塩の身もこがれつつ
壬生忠見　コヒ　恋すてふ我が名はまだき立ちにけり人知れずこそ思ひそめしか
菅家　コノ　このたびは幣もとりあへず手向山紅葉の錦神のまにまに
貞信公　オグ　小倉山峰のもみぢ葉心あらば今ひとたびのみゆき待たなむ
祐子内親王家紀伊　オト　音に聞く高師の浜のあだ波はかけじや袖のぬれもこそすれ
道因法師　オモ　思ひわびさても命はあるものを憂きにたへぬは涙なりけり
猿丸大夫　オク　奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の声きく時ぞ秋は悲しき
中納言敦忠　アヒ　逢ひ見ての後の心にくらぶれば昔はものを思はざりけり
柿本人麿　アシ　あしびきの山鳥の尾のしだり尾のながながし夜をひとりかも寝む
藤原道信朝臣　アケ　明けぬれば暮るるものとは知りながらなほ恨めしき朝ぼらけかな
殷富門院大輔　ミセ　見せばやな雄島のあまの袖だにもぬれにぞぬれし色はかはらず
參議雅經　ミヨ　み吉野の山の秋風さ夜ふけてふるさと寒く衣うつなり
河原左大臣　ミチ　陸奥のしのぶもぢずり誰ゆゑに乱れそめにし我ならなくに
順徳院　モモ　百敷や古き軒端のしのぶにもなほあまりある昔なりけり
前大僧正行尊　モロ　もろともにあはれと思へ山桜花よりほかに知る人もなし
平兼盛　シノ　忍ぶれど色に出でにけり我が恋は物や思ふと人の問ふまで
文屋朝康　シラ　白露に風の吹きしく秋の野はつらぬきとめぬ玉ぞ散りける
大納言經信　ユフ　夕されば門田の稲葉おとづれて蘆のまろやに秋風ぞ吹く
曾禰好忠　ユラ　由良のとを渡る舟人かぢをたえ行方も知らぬ恋の道かな
惠慶法師　ヤヘ　八重むぐら茂れる宿のさびしきに人こそ見えね秋は来にけり
赤染衞門　ヤス　やすらはで寝なましものを小夜ふけてかたぶくまでの月を見しかな
大江千里　ツキ　月見れば千々に物こそ悲しけれ我が身ひとつの秋にはあらねど
陽成院　ツク　筑波嶺の峰より落つるみなの川恋ぞつもりて淵となりぬる
俊惠法師　ヨモ　夜もすがら物思ふ頃は明けやらで閨のひまさへつれなかりけり
清少納言　ヨヲ　夜をこめて鳥のそらねははかるとも世に逢坂の関はゆるさじ
相模　ウラ　恨みわびほさぬ袖だにあるものを恋にくちなむ名こそ惜しけれ
源俊頼朝臣　ウカ　憂かりける人を初瀬の山おろしよはげしかれとは祈らぬものを
中納言家持　カサ　かささぎの渡せる橋におく霜の白きを見れば夜ぞふけにける
藤原實方朝臣　カク　かくとだにえやはいぶきのさしも草さしも知らじな燃ゆる思ひを
紀友則　ヒサ　久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ
後京極攝政前太政大臣　キリ　きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに衣かたしきひとりかも寝む
清原深養父　ナツ　夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月宿るらむ
元良親王　ワビ　わびぬれば今はた同じ難波なるみをつくしても逢はむとぞ思ふ
在原業平朝臣　チハ　ちはやぶる神代もきかず竜田川からくれなゐに水くくるとは
伊勢大輔　イニ　いにしへの奈良の都の八重桜けふ九重ににほひぬるかな
能因法師　アラシ　嵐吹く三室の山のもみぢ葉は竜田の川の錦なりけり

和泉式部　アラザ　あらざらむこの世の外の思ひ出に今ひとたびの逢ふこともがな
壬生忠岑　アリア　有明のつれなく見えし別れより暁ばかり憂きものはなし
大貳三位　アリマ　有馬山猪名の笹原風吹けばいでそよ人を忘れやはする
謙徳公　アハレ　あはれともいふべき人は思ほえで身のいたづらになりぬべきかな
源兼昌　アハヂ　淡路島かよふ千鳥の鳴く声に幾夜寝覚めぬ須磨の関守
天智天皇　アキノ　秋の田のかりほの庵の苫をあらみわが衣手は露にぬれつつ
左京大夫顯輔　アキカ　秋風にたなびく雲の絶え間よりもれ出づる月の影のさやけさ
安倍仲麿　アマノ　天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも
僧正遍昭　アマツ　天つ風雲の通ひ路吹きとぢよをとめの姿しばしとどめむ
參議等　アサヂ　浅茅生の小野の篠原しのぶれどあまりてなどか人の恋しき
中納言朝忠　アフコ　逢ふことの絶えてしなくはなかなかに人をも身をも恨みざらまし
藤原清輔朝臣　ナガラ　長らへばまたこの頃やしのばれむ憂しと見し世ぞ今は恋しき
待賢門院堀川　ナガカ　長からむ心も知らず黒髪の乱れて今朝は物をこそ思へ
三條右大臣　ナニシ　名にし負はば逢坂山のさねかづら人に知られでくるよしもがな
右大將道綱母　ナゲキ　嘆きつつひとり寝る夜の明くる間はいかに久しきものとかは知る
西行法師　ナゲケ　嘆けとて月やは物を思はするかこち顔なるわが涙かな
右近　ワスラ　忘らるる身をば思はずちかひてし人の命の惜しくもあるかな
儀同三司母　ワスレ　忘れじの行末まではかたければ今日を限りの命ともがな
二條院讃岐　ワガソ　わが袖は潮干に見えぬ沖の石の人こそ知らね乾く間もなし
喜撰法師　ワガイ　わが庵は都のたつみしかぞすむ世をうぢ山と人はいふなり
入道前太政大臣　ハナサ　花さそふ嵐の庭の雪ならでふりゆくものはわが身なりけり
小野小町　ハナノ　花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに
持統天皇　ハルス　春過ぎて夏来にけらし白妙の衣ほすてふ天の香具山
周防内侍　ハルノ　春の夜の夢ばかりなる手枕にかひなく立たむ名こそ惜しけれ
後鳥羽院　ヒトモ　人もをし人もうらめしあぢきなく世を思ふゆゑに物思ふ身は
紀貫之　ヒトハ　人はいさ心も知らずふるさとは花ぞ昔の香ににほひける
大中臣能宣朝臣　ミカキ　御垣守衛士のたく火の夜はもえ昼は消えつつ物をこそ思へ
中納言兼輔　ミカノ　みかの原わきて流るるいづみ川いつ見きとてか恋しかるらむ
源宗于朝臣　ヤマサ　山里は冬ぞさびしさまさりける人目も草もかれぬと思へば
春道列樹　ヤマガ　山川に風のかけたるしがらみは流れもあへぬ紅葉なりけり
正三位家隆　カゼソ　風そよぐならの小川の夕暮はみそぎぞ夏のしるしなりける
源重之　カゼヲ　風をいたみ岩うつ波のおのれのみくだけて物を思ふ頃かな
小式部内侍　オホエ　大江山いく野の道の遠ければまだふみも見ず天の橋立
前大僧正慈圓　オホケ　おほけなくうき世の民におほふかなわが立つ杣に墨染の袖
素性法師　イマコ　今来むといひしばかりに長月の有明の月を待ち出でつるかな
左京大夫道雅　イマハ　今はただ思ひ絶えなむとばかりを人づてならでいふよしもがな
凡河内躬恒　ココロア　心あてに折らばや折らむ初霜のおきまどはせる白菊の花
三條院　ココロニ　心にもあらでうき世にながらへば恋しかるべき夜半の月かな
皇嘉門院別當　ナニハエ　難波江の蘆のかりねのひとよゆゑみをつくしてや恋ひわたるべき
伊勢　ナニハガ　難波潟みじかき蘆のふしの間も逢はでこの世をすぐしてよとや
清原元輔　チギリキ　契りきなかたみに袖をしぼりつつ末の松山波こさじとは
藤原基俊　チギリオ　契りおきしさせもが露を命にてあはれ今年の秋もいぬめり
鎌倉右大臣　ヨノナカハ　世の中は常にもがもな渚こぐあまの小舟の綱手かなしも
皇太后宮大夫俊成　ヨノナカヨ　世の中よ道こそなけれ思ひ入る山の奥にも鹿ぞ鳴くなる
藤原義孝　キミガタメヲ　君がため惜しからざりし命さへ長くもがなと思ひけるかな
光孝天皇　キミガタメハ　君がため春の野に出でて若菜つむわが衣手に雪はふりつつ
坂上是則　アサボラケア　朝ぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里に降れる白雪
權中納言定頼　アサボラケウ　朝ぼらけ宇治の川霧たえだえにあらはれわたる瀬々の網代木
法性寺入道前關白太政大臣　ワタノハラコ　わたの原こぎ出でて見れば久方の雲居にまがふ沖つ白波
參議篁　ワタノハラヤ　わたの原八十島かけてこぎ出でぬと人には告げよあまの釣舟

鐵筆版器械之部（附屬品共壹組ニ付）

種類	壹號ハガキ版	貳號美濃半分	參號半紙全面	四號美濃全面	五號西之内版
特附	……	貳拾參圓	參拾壹圓	參拾六圓五拾錢	四拾五圓
同上ヨリ四ツ又字消刻ヲ除ク	……	貳拾圓	貳拾七圓五拾錢	參拾貳圓五拾錢	四拾圓五拾錢
普通	八圓	拾六圓	貳拾壹圓	貳拾四圓	參拾圓
摘要	騰寫		百貳拾圓迄		

毛筆版器械之部（附屬品共壹台ニ付）

種類	價格
第三號半紙全面	拾九圓
第四號美濃全面	貳拾壹圓

（堀井原紙壹枚にて五千五百枚を印刷す）

大正十二年五月十八日發明博最終の日實演

東京市神田區鍛冶町參番地

堀井謄寫堂本店

電話神田　四二二、四二三、四二四、四二五、四二六番